



## 人種差別、平和問題とスポーツの可能性

今回のワールドカップが終わった後、オシムさんは、「優勝したドイツは、ポーランド系、トルコ系、アフリカ系などの選手が代表に定着し、それを国民も受け入れていた、社会が安定していないと、多民族の代表は機能しない。移民政策が成熟して、社会が安定しているというのがチームの背景にある」と言っていました。スイスも選手の半数以上が外国にルーツをもっていたんです。今、世界は動いています。ワールドカップ出場32カ国で「単一民族」の国は存在せず、多民族・多文化の共存が当たり前になっているのです。

## 紛争激化のメカニズム

紛争地である、旧ユーゴに暮らしていました。昨日までの友達が、民族主義者になって、別のある者は国を去っていく。人間はこんなに変わるものなのか、こんなにひどくなれるのかと自分の無力さを感じるばかりでした。

今になると、戦争や民族主義に流される仕組みがあるということがわかってきました。政治的な圧力を受けたマスコミが煽っているのです。自然発生的に起こる紛争や戦争はない。必ず原因はある。それをとり除くことで、紛争や戦争は防止できると思っています。

そのためには、マイノリティーの立場に立ち、寄り添って考えることを大切にしたいと思っています。オシムさんの通訳ですごくよかったです。サッカー観も共感していたし、なにより、弱い者いじめをしないという、人格的に共通するものがあつたからです。

## 原点は 弱い者いじめしない

ジャーナリスト・通訳 千田 善さん

### オシム元監督の通訳を通して

オシムさんはものすごく目がいいんです。普通の人には見えないもの、わからないものが見える。グラウンドの端から、反対側の端で選手がサボっていたら、見つけて名前を大声で呼ぶとかね。「どうしてわかるんですか？」と聞くと、「顔を見る」って。選手が困っているとか、いきいきしているとか、自信がなさそうだとか、全部顔に出ると言うんです。

さらに、オシムさんだからこそその視点があります。選手の調子が悪いと、僕たちは気温や体調のせいなのかと考えます。オシムさんは、昨日奥さんとケンカしたんじゃないとか、子どもが熱を出したんじゃないかと生活の視点からも総合的に考える。選手を、ただそこにいる人としてだけではなく、人生のバックグラウンドまでつかむのです。(談)

ちだ ぜん / 1958年、岩手生まれ。大学卒業後、ベオグラード大学大学院で学ぶ。ユーゴスラビアで10年近く生活を送り、国際政治、紛争を取材。2006年より、元サッカー日本代表監督イビチャ・オシム氏の通訳を務める。著書に『オシムの戦術』（中央公論新社）、『なぜ戦争は終わらないか』（みすず書房）など多数。